

日本財団
2023 年度 子どもの居場所
報告書

フリースクール地球子屋
拠点名「地球子屋」

作成者 加藤 千尋

作成日 2024 年 3 月 31 日

はじめに

1996年にフリースクール地球子屋が開所して以来、数百人の子どもと保護者がここに相談し、居場所として活用してきた。そういった子どもたちはその後、社会人となり大人として生活をしているとの報告を受けるたびに、このような場所の必要性を再確認してきた。

地球子屋では、できる限りその子どもの心身にどのような変化があるのか、科学的な根拠や視点をもちながら理解を深めてきた。

日本社会が急速に劣化し、経済的困窮や精神疾患が増えている現状を踏まえると、子どもの居場所は、第二の家庭的な安心感や家族的な人間関係を築く場所として必要不可欠であることはもはや疑う余地はない。

子どもが健全に育つための条件として、危険や暴言暴力がない環境であることが大前提であり、その上で遊びを中心とした自由に子どもの能力が発揮できる環境が必要である。ところが、虐待、マルトリートメント、性暴力、過保護・過干渉など親子関係の中に暴言・暴力による支配的な関係がかなりある。保護者が保護者としての資質・能力に欠けており、その背景には偏差値教育に注力してきたことによって基本的な人間関係や家事・育児能力を育ててこなかったことがある。日本社会が経済的発展を追い求め、丁寧で精神的に豊かな暮らし・生活について1人ひとりが考え実践することを疎かにしてきたツケなのではないだろうか。

そして学校生活や職場生活においても、体罰、スクールカースト、イジメ、パワハラ、セクハラなど支配的な暴力が温存されてきている。マウンティングなど他者と比較して優越感をもつことを社会全体が許容している限り、支配的な暴力は無くなることはないだろう。日本社会全体にある生きづらさはこのような背景があるように思えてならない。このような暴力が継続する中で生きていくためには、他者との関係に配慮しなければならず常に緊張状態をもって対応しなければならない。外でも家でもそのような状態が続いていけば、ストレスが炎症反応を引き起こし間もなく自律神経がおかしくなっていくのである。

初年度は、子どもたちとの関係や活動を見直した。二年目は、子どもの特性をしっかり把握して1人ひとりに合った対応を心がけ、スタッフのスキルアップに努めた。その結果、学校ではかなり難しいと言われた子どもであっても地球子屋で大きく成長することができた。改めて支援いただいた日本財団そして熊本市には感謝の意を表す。

フリースクール地球子屋
代表 加藤千尋

この報告書は、3つのパートに分かれている。

1) 居場所活動と子ども達の様子

月ごとに居場所内での象徴的な活動を紹介し、その様子を報告している。

2) 子どもたちの変化

居場所に通う子どもたちにどのような変化があったのか、代表的な子どものケースを小学生編と中学生編に分けて報告している。

3) 保護者、学校との連携

子どもの居場所をつくっていくにあたり、保護者や学校とどのように連携しているのかを簡単に報告している。

この報告書は、当団体の取組の記録として、また子どもの居場所活動をされている団体へのヒントとなることを願って作成いたしました。ご参考になれば幸いです。

1) 居場所活動と子ども達の様子

○4月～6月

子どもの居場所「てらこや」を周知するために、熊本市子ども政策課、保健子ども課、教育委員会、子ども若者総合相談センター、教育相談室、児童相談所、子ども発達支援センター、ひきこもり支援センターなど公的関連機関、支援機関へ連携・協力を要請するため子ども募集チラシへ配布した。

子どもたちは、前年度から引き続き来所している子を中心に、新規の子どもたちを受け入れ、仲間づくりができるように人間関係づくりのプログラムを中心に展開した。

天気の良い日にみんなで遠足にも出かけることができた



日本財団「子どもの居場所」事業 熊本市と協賛を結んだ自治体取り組みです！

フリースクール
NPO 法人
地球子こや
てらこや

15歳までの子どもとご家族にとっての笑顔づくり安心基地

子ども利用者
大募集中！！

「てらこや」

○問合せ・応募先 NPO 法人フリースクール地球子こや 担当:加藤千尋 (電話:080-2486-2999)
メール:freeschoolterakoya@gmail.com 場所:〒860-0847 熊本市中央区上林町3-34 2階

○どんな思いで「てらこや」をつくったの？

熊本県内の子どもたちが通っています！今の子どもたちは、一人ひとりが様々な環境で育っています。中には実親になれない子どももいるかもしれません。どんな子どもも学校や家庭だけでなく、地域のいろいろな人とつながりあって、愛情を感じて幸せに暮らしてほしいと私たちは願っています。しかし誰かを感じたらいかに不安を感じるような時代になったのも事実です。

私たちは、熊本市、日本財団と三者協賛を結んだ公的の事業としてこれまでありそで無かった子どもの気持ちに応えて先例にする、異年齢が集う子どもの居場所をつくりまします。少人数・登録制や経験豊かな大人と一緒に育ちを見守ります。現在、利用者を募集中です！

○一日(平日～金)の活動例

13時	開所～健康観察
13時半	一緒に体験活動1(学校が早い場合)
～14時半	活動例 絵スゴーズ、食育、お仕事体験 コミュニケーションゲーム、野外活動など ※学校に行けない子どもも受け入れています
15時	おやつ・自由遊び
16時	宿題など
17時	一緒に体験活動2
～18時	活動例 脳トレ、多文化体験、英語講座 レクリエーション、プログラミング、食育
18時半	夕食補助・支援(希望者のみ)
19時	閉所



子どもの居場所「てらこや」の特徴は、小学校低学年から高校生までの年齢幅がありつつも、学年ごとにまとまることなく1つの兄弟姉妹のように過ごせる場所である。また様々な発達課題などがあったり、学校での辛い体験を引きずっていたりと複雑な背景もある子どももいる。

こういった子ども達の特徴として、体調が不安定な子どもや昼夜逆転しがちな子どもがいることから、毎日の健康観察を特に重視している。

健康観察では、体温、体調、朝食・昼食を食べたか、睡眠時刻や時間を細かくチェックする。その際には1人ひとりに語りかけて顔色や表情を細かく観察する。毎日行うことで、子どものちょっとした心境の変化や体調などに気づくことができる。

この健康観察を行うことで流行性胃腸炎、インフルエンザなど迅速な対応ができた。また心境に寄り添うことで日々の出来事について相談しやすいきっかけになっている。

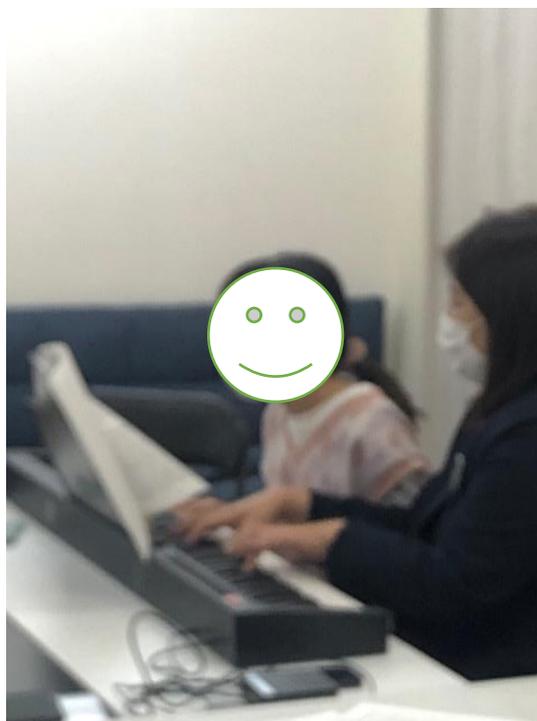
5月からは、継続した活動をいくつか始めることができた。

それは、身体活動と子ども同士の関係構築や協力を実感するバドミントン、楽器を使った音楽活動で自己表現する機会を作った。どちらも手先を使うことで脳の発達によいと言われており、非認知能力と言われるねばり強さや集中力を高めることが期待され

る。



レクスポーツ「バドミントン」



音楽プロジェクト

コミュニティモデルとして商店街や近隣の大学に留学生として来熊した外国の方と連携している。

EAT theWorldは、外国の方をゲストにお呼びして、その国の文化など話を聴き、その国の料理やお菓子を一緒につくる活動である。

地球には多様な民族、文化をもつ人がいることで日本国内の価値観にだけ囚われることなく多様な価値観に触れることは子どもたちに大きな刺激を与えてくれる。

事前学習としてその国の地理や歴史、文化などを調べ学習することで自然とその国について興味関心を高める工夫をした。

また主に英語で会話をするようになるので外国語を学びたいというきっかけにもなる。

英会話をアドリブで行うのは緊張してしまうので、あらかじめ聞きたいことを出し合い、英語での質問方法を伝えておくことで当日も質問することができた。

外国の方は熊本大学の留学生として来日している人が多く、普段の生活で母国のお菓子や料理をする機会はないため喜ばれている。

このEAT theWorldプログラムは、毎月1回のペースで開催し、世界のさまざまな国の人をゲストにお呼びして交流を楽しむことができた。



シンガポール出身のイザベルさんから手遊びを習う



一緒に「カヤパンケーキボール」をつくりました



○7月～9月

季節行事には子どもの成長を願うものもあり、大人の思いを子どもに知ってもらうために、また季節の移り変わりを感じ、その季節ごとの過ごし方や生活の工夫などに触れるためにも、地球子屋の飾りつけなどの活動に取り入れています。7月は七夕で、今やこれからの希望を考えるよい機会となった。



またコミュニティモデルとしても力を入れているのがニュースポーツ「フラッグハント」である。今年2月に九州初開催から多くの参加者の継続希望の要望を受け、また日本財団からの活動支援もいただけたこともあり定期開催が可能となった。



赤外線光線銃とセンサーを装備し、障害物を活用しながら相手陣内の旗を取るというゲーム世界をリアルにしたようなスポーツで子どもも大人も夢中になって取り組みます。自然と汗びっしょりになるくらいの運動である。この準備、ルール説明、審判など地球子屋の子どもたちが中心となって取り仕切り、地域の子も達や大人と一緒に楽しむことができた。



また見ず知らずの人同士でチームを組む中で自然と名前を覚え、チームで作戦を話し合うことでお互いにコミュニケーションを豊かにすることができるのも特徴である。

フラッグハントを継続することでつながるコミュニティが生まれたことは良い成果とあった。

季節行事として、すいか割りも体験。
すいかが見事に割れた

夏休み期間となり、子どもたちとどのように過ごすか話し合い、計画を練りました。

今の子どもたちは、驚くほどに体験が少なく、それが故にさまざまな事に想像力が働かずに消極的になる。消極的になれば、さらに興味関心の幅は狭くなっていくという悪循環が生まれるのである。

本来であれば、ご家族と海や山などレジャーに出かける機会もあればよいのですが様々な事情でそういったことができない家庭もあります。そこで地球子屋では日帰りのお出かけなどを取り入れて非日常的な体験ができるようにしている。

1 か所目は、通称「猫島」と言われる湯島へのお出かけです。海がきれいで、釣りもでき、島には島民以上に猫がいるという癒しのスポット。上天草から船で30分という距離も日帰りながら小旅行的な気分が満喫できます。

朝集合しお昼ごろに船に乗り、湯島へ到着。午後の時間をゆっくりと湯島で過ごして夕方に帰り着くという日程。

2 か所目は、北九州市にあるトランポリン施設「トビクル」。ある子どもが行ったという話からみんなで行きたいという盛り上がり、1日かけてトランポリン体験ができた。全身運動になり帰りの車中ではみんなぐっすり。とても楽しい1日となった。



8月後半から9月は、子どもの自殺が多くなる時期と言われている。地球子屋でも4-5月の次に8-9月は、いじめや学校生活の不安を抱えている子どもにアプローチした。相談機関の相談員やSSWなど対象とした「いじめ、不登校、ひきこもり」に関する研修講師としてその実態や起こるメカニズムについて伝え、連携することの大切さを訴えた。

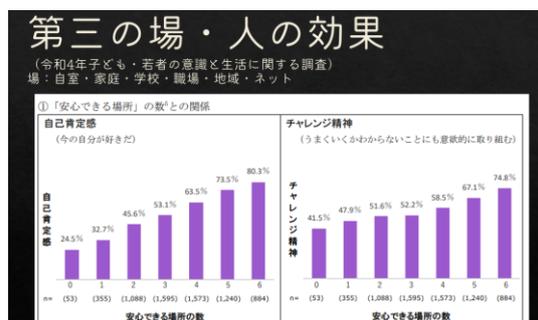
子どもたちの中には夏休みに生活リズムが崩れて、体調が優れない子どももいる。健康観察を欠かさず行い生活を整える工夫を子どもやご家族に伝えていった。

2学期となり学校に行かない・行けない子どもにとっては学習の遅れが気になってくる時期でもある。

教科書や問題を解くことが勉強と思いついでいる子どもが多い中、学習の方法は多様にあることに気づいてもらうために、自らの手を動かす科学実験に挑戦した。普段の生活の中では考えられないような自然科学の不思議さと実験の成功への達成感などが味合うことができた。

自然の中にある不思議さを感じてもらうためにも身近なものから考えさせるものを利用した。

こういった体験から科学や理科に興味を持ってくれた子どももいた。



研修会で使用したスライド（一部）



氷蜜の味当ての実験



リトマス試験紙による酸性・アルカリ性を調べる実験

○10月～12月

夏の暑さもようやく落ち着いて、子どもたちもじつくりと腰を落ち着けて何かに取り組む時期となった。

そこで子どもの発達段階に応じたプログラミングの指導を受けながら取り組み、自分が実現したことをプログラミング上でできたことに充実感を得た。

小学校低学年向けには、昨年もご指導いただき好評だった MESH センサーを用いたプログラミングに取り組んで。MESH センサーには、音に反応するもの、光に反応するもの、さまざまな条件で反応するものなど6種類のセンサーがある。そのセンサーを日常生活で使うものと組み合わせ、タブレット上でプログラミングする。

低学年の子どもにとってセンサーを活用することが初めてで最初はどのようによいかわからなかったが継続していく中でセンサーの特徴をつかみ生活上のものと組み合わせるアイデアも出てくるようになった。

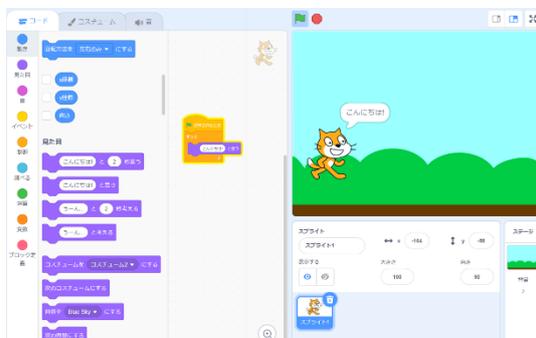
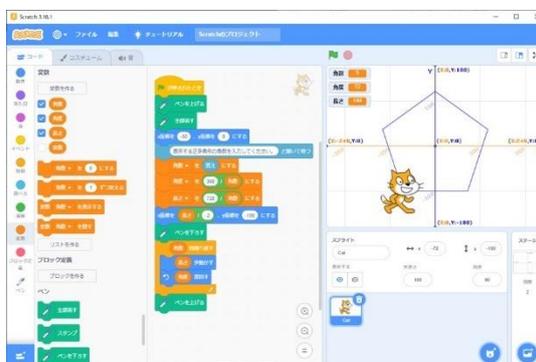
小学校高学年は、PC でスクラッチプログラミングに取り組んだ。

何ができるか基本的なプログラミングについて学びつつ、自分なりに応用していくことを考えてもらったところ、オリジナル音楽や簡単なゲームなど作ることができた。

プログラミングは興味をもった子を中心に継続している。



MESH センサーによるプログラミング



スクラッチによるプログラミング

10月から11月にかけてハロウィンの飾りつけに取り組み、フラッグハントで使用する障害物（バンカー）を利用したハロウィン迷路をみんなで取組んだ。

1m四方ある障害物を組み合わせて巨大迷路をつくりこむ作業は大変子どもたちの中で盛り上がった。

ハロウィン当日は、パンプキンパイづくりにも挑戦し楽しいひと時となった。

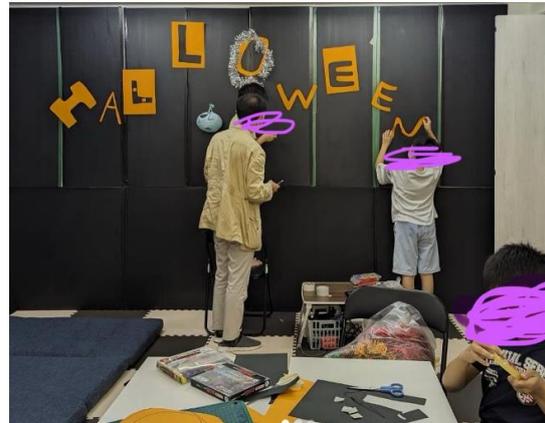
また科学実験の取組から派生してある子どもの一言からみんなでやってみたいと意見がまとまりました。

その実験とは、液体なのに一点に圧力がかかると固体になる性質の非ニュートン流体、別名ダイラタンシー流体と言います。

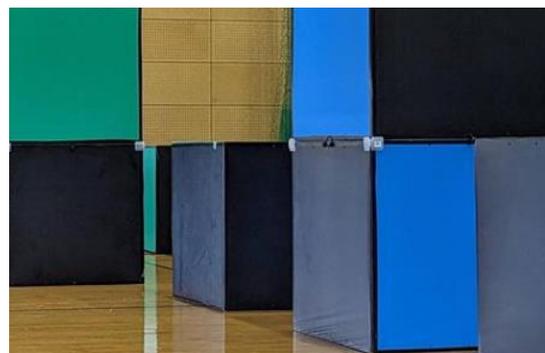
この流体をつくるにあってコーンスターチと水の配合がなかなかうまくいかなかったのですが、諦めずに何度も挑戦してようやく非ニュートン流体をつくることに成功。

子どもたちはみんな興味津々で何度も液体を触って、どうしてこのような現象になるのかとても不思議がっていた。

子どもたちが主体的に興味関心をもって取り組んだことはとても良い機会となった。このような機会がこれからも増えるようにしていきたい。



ハロウィンの飾りつけについて、子ども自ら考案し作業をしていった



フラッグハントのバンカーを上手くつかって巨大迷路をつくった



非ニュートン流体を恐る恐るさわりその不思議な現象を体感

フラッグハントのコミュニティが九州熊本で生まれてくる中で、フラッグハント協会が主催するジャパンフラッグハントカップへの出場する機会を得た。

全国のフラッグハントを楽しむ仲間コミュニティとつながる機会となった。会場は、千葉県と遠方ではあったが8人の子どもたちが参加することができた。

旅行の日程、手段など何度もミーティングを重ねていながら各家庭の負担なども考え、なるべく費用を抑える方法がないか模索した。

LCCの航空券の手配、コンドミニアムによる宿泊などによって通常の半値以下の金額で参加が可能となった。諦めずに情報を集め検討をし続けた結果であった。

ジャパンフラッグハントカップには全国各地から10チームの参加があり、当然ながら九州からは我々だけで、それも初参加となり歓迎された。

5チームごとに予選があり、子どもたちは1勝3敗という結果に終わり本選には出場は適わなかったものの全国の猛者たちと出会い、試合ができたことに充実感と今後もっと上達したいという目標が生まれた。

初めて飛行機に乗った、初めて県外で宿泊したという子どももおり、よい経験になった。

○コムドットさんとバスケット体験

日本財団から連絡をいただき、youtuber チームのコムドット5人とのコラボ動画の企画をいただいた。

急に話をいただき、日程もあまり時間がない中で受けるかどうか子どもたちと話し合いを重ねた。

子どもたちの中には、よく知っており尊敬の念を持っている子どももいれば、全く知らない子どももいた。ただ単に有名な人と会うということではなく、バスケットボールの体験からバスケットの魅力を伝えたいという趣旨だったことから、バスケットと一緒に楽しむという目的であれば受けたいという結論に至った。

当日は撮影が禁止となったため、画像はないがyoutubeにコラボ動画があり、保護者や学校関係者にも幅広く御覧いただき、子どもたちも楽しく体験できた。



関東と中心に全国各地からフラッグハントのチームが集まった

○1月～3月

地球子屋には、中学3年生も今年は4人おり、それぞれの進路について考える時期がきた。

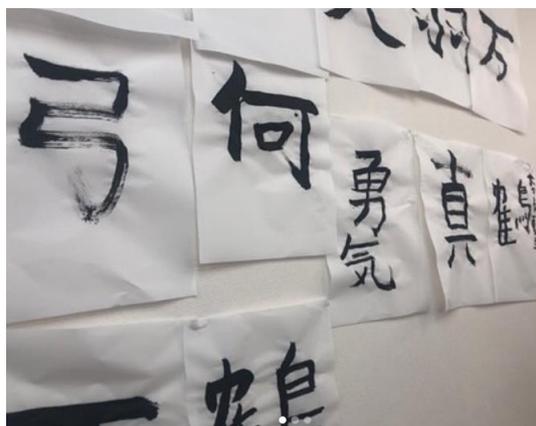
小学生においても今後どのような大人になっていきたいか考えるよい機会にもなった。

通信制高校を選択したある中学生は、高校生から助言や面接の練習をしてもらうなど互助の精神が見られた。

1月は恒例となった書初めから始まり、お雑煮づくり、七草粥づくりなど新年ならではの行事に取組んだ。その1つ1つに意味があることを知り、驚いていた。

Youtuber コムドットさんたちとのコラボ動画を間近に見た一部の子どもたちからは動画作成に興味をもち、動画作成のプロジェクトが始まった。見様見まねで始まったが、継続する中で撮影のコツや編集方法などより高度なスキルを身につけていき、自分なりに動画を作成することができるようになっていった。

子どもたちの「やりたい」「上手くなりたい」という気持ちやエネルギーが上手く実現するととても成長につながる好事例になった。コムドットさんたちとのコラボがこのような形に身を結んだことは大変良かったと思う。



普段、鉛筆やペンしか使わない子どもたちにとって筆で文字を書くことは新鮮。今後は、毎月書道をしていくことになった。



動画撮影は、何をテーマにどのように伝えるのかをよく考えて撮影しなければならない。

1人では難しいため、何人かとチームになって取り組んだ。

中には、実写ではなく流行の素材を組み合わせてつくる動画にも挑戦し実際に完成することができた。

寒い時期だからこそ身体を動かしたいということでスポーツ施設で身体を動かした。もともとはコムドットさんたちと体験したバスケットに興味をもった子どもからの発案であった。

プログラミング、動画撮影などデジタル機器を使うことが身近になってくるにつれて、ネットの危険性についてもリテラシーを向上させておく必要がある。

そのためオリジナルのネットの危険性に気づくための紙芝居を作成して、子どもたちと考える機会をつくった。

紙芝居を読み進める中で、ワークショップ形式でネットの危険性については話し合うもので、10の危険性について気づくことができた。

現実には危険と知りつつも、達成感や経済的な魅力を優先してしまうことがよくある。

実際の事件や事例についても触れ、ネットに情報がさらされることが人生に大きな影響を与えることをみんなで共有できた。

ある子どもは、そこまで深刻な事態になることがあるなど考えたこともなかったと感想を述べてくれたが、自分にもいつ起こる可能性があるということを実感できたようであった。



スポーツ施設でバスケットやセグウェイなど身体を動かした。



子どもたちの身近なところに危険があることに気づけるようなストーリーとなっている。

3月は別れの季節である。
中学3年生4人は無事に希望する高校に合格することができた。

また子どもの居場所「地球子屋」当初から関わってくれたスタッフが移転のため今月いっぱいとなった。

そこで関わってくれたスタッフに感謝の気持ちを伝える「ありがとうの会」を開催した。

どのような活動をともししてきたかを映像で振り返り、子どもたちが企画したレクリエーション（クイズ大会、手品、どっちが早くできるか競争など）で盛り上がり、最後はみんなで作ったお菓子と花束贈呈をした。

毎年恒例となった雛人形の飾りつけもして子どもが健康に育ててほしいという願いを伝えた。

一年を振り返り、自分がどう変化したか、成長できたかを確認しあった。振り返ることが得意な子どももいれば、苦手な子どももいる中、スタッフと一緒に年間の活動を振り返ると記憶が喚起されて思い出すことができた。毎日の繰り返しのようで、一年間さまざまな活動ができたことをみんなまで共有できて良かった。

最後は、新年度に向けての準備として、新しく加わってくれるであろう子どもたちを迎えるための大掃除に取組んだ。このようにして自分たちの居場所であることを自覚が芽生えたと考えている。



手作りお菓子「いちご大福」をつくる。さらにそれを動画撮影してアップしていた。これまでの積み重ねからできる事がたくさん増えた。



スタッフ A さんのありがとうの会は、子どもたちの企画で大変心温まる時間となった。

2) 子どもたちの変化

小学生ケース1 Sさん

小学校低学年Sさんは、お兄さんが地球子屋に来ることになり、一緒に体験することになったところ、本人も利用したいとなった子どもである。

学校には入学当初は登校できていたもののすぐに行きたくない気持ちが強くなった。席を立ててお友達のところに行く、教科書など開かず自分のやりたい事をするなど学校で馴染めないことを保護者も気づいており不安視していた。就学前にSさんの言動から発達検査を受診し、ADHD、学習障害の傾向があるとわかっていたため無理はさせず学校を休ませることも多くなっていった。

兄と一緒に地球子屋に来たときは、とても元気であったが、興味関心の幅が狭く、何事にも消極的でお兄さんの傍から離れることがなかった。最初は、新しい環境に戸惑いすぐに帰りたいた言っていたが、利用をはじめて3か月経ちスタッフとの関係ができてきたからは、最後まで過ごすことができるようになった。一緒に過ごせるようになってきた話合いや食育や科学実験など少しずつ参加できるようになってきたことで地球子屋には馴染んだことがわかった。

日本財団のクリスマスプレゼントが届き、恐竜のミニチュアセットが入っていたのを見つけたSさんは、とてもそれが気にいった。そこから恐竜を使ったごっこ遊びが始まり、想像力が

とても豊かでその世界に没頭していることがわかった。繰り返し何度も遊んでいたため、就学前の時期にごっこ遊びなどの体験があまりなかったのではないかと推察される。地球子屋で子どもの時期にすべき段階を1つ1つ上がっている様子がうかがえた。

そのうちに年齢の近い子どもと一緒に遊ぶなど子ども同士の関係性も生まれてきた。その中で集団のルールを守りながら楽しむことを覚えて、Sさんの世界がまた1つ広がっていることがわかった。

現在は、文字や計算など学習面においても意欲が芽生え始めており、何かできるようになったら、スタッフに教えに来てくれるようになった。

学校のペースには合わないかもしれないが、Sさんは自分のペースでしっかりと成長をされていることは明らかでそれを保護者にも報告すると安心されていた。

今後の目標としては、自分のモノをアチコチ置いて忘れて帰ることが多いため、モノの整理整頓をすることやyoutuberに興味関心があるので自分のできる範囲で動画撮影に挑戦することになるだろう。

自分の世界を持っているSさんは、その世界観を他の人に理解してもらえることが必要だったのではないかと考えられた。今後Sさんがどのような方向へ成長していくのか楽しみである。

小学生ケース2 Yさん

Yさんは、何人か兄弟姉妹がいる中の中間子である。小学校の高学年になって、ずっと家に居てゲームばかりの生活に加え、昼夜逆転となったことを心配して地球子屋を体験した。

最初数回を体験したものの、継続した利用にはつながらなかった。

その間に一番末の弟も学校に行かなくなり、弟が地球子屋を利用するようになっていったが、Yさんは相変わらず昼夜逆転と朝起きるのが苦手であること、それに体調の不調もよくあったため、なかなか利用が進まなかった。

それが利用につながったのはフラッグハントの活動が日常的に地球子屋でできるようになったためであった。弟さんにその楽しさを聞く中で自分も参加したい気持ちになったと教えてくれた。身体を動かすことをずっとしていなかったために、体力的に厳しいものがあり、最初こそ短時間しか遊ぶことができなかったが、少しずつ体力が戻ってきて、他の子と同じように参加できるようになった。

今では地球子屋に来ることが目標となり、昼夜逆転も改善されていき、生活リズムが整ってくるにつれてより健康になっていった。

1月から遅れている学習にも取り組みたいという提案があった。4月から中学生となることをきっかけに登校する意欲が出てきた。保護者もこのような変化に大変驚かされていた。

小学生ケース3 Hさん

Hさんは、とても負けず嫌いな面があり、学校生活の中で様々な競争的な場面があるがなかなか勝つことができなかった。また学校生活の中で「イジリ」「煽り」のような言葉が日常的に使われ、感情的にならざるを得ないことも多く、学校生活に疲弊していた。

そして学校には信頼できる友だちはいないと悟り、学校へ行く意欲が無くなっていった。

そんな中に保護者とともに地球子屋を体験した。子どもの居場所であること、自分のペースで過ごしてよいことなどがHさんには合ったらしく次の日から通うようになった。

学校生活で誰かと張り合うことを学んでいたため地球子屋でもゲームなどで勝つことを無意識のように目標にしていた。当然ゲームに負けることもあり、その際、自分が受けてきた暴言をここでは言う側になってしまい人間関係がギクシャクすることもあった。

みんなが安心して、安全に過ごす場所であることを丁寧に根気強く伝えていったところ、暴言は無くなっていき一緒に遊ぶことができるようになった。怒りの感情を上手く処理できるようになったことは、この1年でとても成長できた。興味関心の幅が狭い面があるため、今後はいろいろな体験を積み重ねていき、Hさんができることを増やしていきたいと考えている。

3) 保護者、学校との連携

子どもの居場所をつくっていく中で保護者との連携や信頼関係が鍵となると考えている。

特に不登校の子どもたちを中心に受け入れてきた実績がある地球子屋は、子どもだけでなくご家族全体が子どもを理解して、関係を改善していくことを目指している。

保護者に対して、いくつかの支援メニューを用意して取り組んでいる。

(1) 不登校学習会

不登校の子どもを理解することは、簡単なことではない。一人ひとりのケースは全く異なっており、他の子どもに当てはまるケースも我が子には通用しないことはざらにある。

そんな背景があるために、理解することは困難を極めるがそんな中においても対応の原理・原則がある。

その原理・原則を地球子屋流子育て術としてテキストにまとめ、学習会を毎月1回開催している。



テキスト表紙

子どもがどのような状態にあるかをまず5段階で把握することから始め、各段階において4つのステップを取り組んでいくことで子どもと見方がわかり、その子に応じた対応方法が理解できる構成としている。

6回を1セットとしており、半年間かけて学んでいく。この半年間の間に保護者も試行錯誤をしてみて5段階20ステップを試して、有効性を確認することができる。これまで述べ数百人の保護者の受講があった。

(2) とともに育つ親の会

ともに育つ親の会は、地球子屋を利用する子どもの保護者だけでなく、まだ利用に至っていない保護者でも参加できるオープンな会である。

子どもが学校に行けない・行かないという状態になると他の誰かに相談しようにもなかなか周りに理解者はいないものである。子どもだけでなく保護者自身も孤立感を募らせて、親子関係も悪化するのが常である。そんな保護者が集まり、今の出来事や気持ちを率直に共有することで孤独感が解消されることが期待できる。

他の保護者の意見や気持ちを聴くだけでも参考になることがあるし、また自らの誰にも言えないようなことを吐露することで気持ちの整理につながり、子どもと向き合えるようになる。こういった場があることで救われたと保護者のみなさんから好評である。

(3) 学校との連携

熊本市では、地球子屋を定期的にご利用するようになると学校の管理職や担任が訪問して子どもの様子を確認する。子どもが自分のペースで学び成長していることが確認されることで出席の扱いにもなる。

このような流れになったのは2019年に文部科学省の方針転換を機に理解を示したからである。

地球子屋も毎月子どもがどのように過ごしたか、何日の利用があったかなど個別に学校へ報告しており、その連携は少しずつ深くなっている。

結果論ではあるが、子どもが自らの学びを選択できるように促した結果として、再び学校へ行きたいと意欲を取り戻し登校にもつながるケースが後を絶たない。(決して再登校をすることだけを目的にしているわけではない)

学校とも連携し、時にケース会議に参加したり、相互で情報を交換して様子を伝えあったりして、ほとんどの学校では出席扱いとなったことを子どもの安心感にもつながっている。今後よりよい連携の在り方を探っていきたいと考えている。

(4) 教育委員会

熊本県教育委員会、熊本市教育委員会を中心に、今後もさらなる連携を深めていくことを要望した。

課題として学習指導要録に居場所で行った学習内容を転記できるよう

にするためである。

学習評価があることで、学校の通知表に成績を掲載することができる。その是非についてはまだ議論があるものの保護者の一部には地球子屋の学びを学校でも認めてほしいという要望もあることから検討をしていく方向で話を進めている。

(5) 相談機関

熊本市子ども・若者総合相談センターから依頼を受けて、相談員を対象とした「不登校・ひきこもり」への対応方法の研修を行った。

相談員といっても不登校・ひきこもりについて専門的に学んだ経験はないことから大変好評であった。

(6) 熊本県スクールソーシャルワーカー(SSW)研修

SSW対象の「ひきこもり」への対応について研修を行った。

学校へ在籍している子どもについて話をしたが、年々学校在籍を離れてひきこもりが継続するケースが増えている現状を踏まえ、家庭への介入の重要性やその具体的な方法について触れ、連携の重要性を説いた。

日本財団助成

事業名

熊本県熊本市における「子ども第三の居場所」(B)コミュニティモデルの運営(2年目)

実施団体

NPO 法人フリースクール地球子屋

作成者

加藤千尋

連絡先

NPO 法人フリースクール地球子屋

メール freeschoolterrakoya@gmail.com

電話 080-4286-2999